

## マイノリティ・アーカイブズの言挙げ

美馬達哉

(立命館大学)

### なぜ、マイノリティとアーカイブズか

私のようにそれほど原資料に触れない研究者であっても、医療社会学の研究を進めていく中では、マイノリティとしての病気や障害を持つ人びとの記録を扱うことは多い。そのとき、しばしば研究対象となる諸事実そのものが、量的・質的な社会調査、医学史研究、当事者運動研究、社会福祉制度史研究、生命倫理学研究、手記やドキュメンタリー文学などのディシプリンを異にする分野に散逸していることに気づき、領域横断研究の重要性を痛感している。また、たんにたくさんの領域を含むだけでは不十分で、理論的な反省という作業を含む生命倫理学・哲学などの手法が多様なマイノリティの雑種性や複合性を考察するのに有効であるとも考えている。その一方、歴史的に見れば、マイノリティを記録することは社会統制の一翼を担う実践でもあり、とくに障害者運動において強い批判を浴びている (Nothing about us without us)。この点を忘れてはならないだろう。

以上の点から、マイノリティに関する記録を領域横断的にアーカイブ化すると同時に、記録しアーカイブ化することの意味を、当事者の活動と連携しつつ理論的に再考するプロジェクトであるマイノリティ・アーカイブズの着想を得た。

マイノリティと記録の関係性という観点から、管理・保存の技術に留まらないアーカイブの人文社会科学的な問題化を達成することは、このプロジェクトの最大の挑戦である。

自然科学系を中心に「オープンサイエンス」が世界的潮流となりつつあり、理系文系を問わず公的研究費による研究成果は公共的にアクセス可能なコモンズであるべきとのコンセンサスが生まれつつある。この現代的状況下でのアーカイブ化は、論文など研究成果に留まらず、資料・記録・生データのレベルでのオープンな知的交流やデータの創造的再利用を可能とするインフラとして構想されていると言える。

さらに進めて、本プロジェクトでは、研究活動とアー

カイブ化を分離した活動と見るのではなく、アーカイブ化そのものが新しい領域横断的な研究を生み出す側面に着目して挑戦的な「アーカイブズ・スタディーズ」を創設したいと考えている。

マイノリティの記録は多種・少量な特性を持ち、多様な媒体 (政府統計、アンケート、機関誌、チラシ、ビデオ、インタビューデータなど) に分散している。だが個別のマイノリティについての記録は一つ一つをとれば量的に多くはない。そのため適切に利用可能なアーカイブ化を行うには専門業者への外注だけでは不十分であり、研究に携わっている研究者らが主体的に複数領域でのアーカイブ化に関わる必要がある。このアーカイブ化という作業を共同的に行うことを通じて、マイノリティ間の比較研究や歴史学的研究と社会調査との交錯した研究など領域横断的な研究成果が生み出され得るだろう。

### マイノリティ・アーカイブズの プロジェクトが目指すもの

本研究は、マイノリティとされてきた人びとの主張や活動の記録をアーカイブ化することに挑戦するため、立命館大学生存学研究所で継続的にアーカイブ化してきた身体・精神・知的障害や病を持つ人びとの記録から出発して、エスニシティやジェンダーなど他のマイノリティについても展開する基盤となる人的ネットワークを構築することを目的とする。

本プロジェクトでは当面の研究対象として20世紀半ば以降の日本だけに狭く設定している。だが、グローバル化の現状と戦後史の読み直しのなかで、今回のシンポジウムでも示されたように、とくに東アジアにおいて国境を越えたマイノリティの「生存」があることははっきりしている。また、時代を比較的に近い過去に限定しているのは、マイノリティ記録はしばしば断片的であり、オーラルヒストリーやインタビュー調査で補い得る時代から着手する必要があるためである。この点については、塚原さんの報告を聞いた後では、これから革新的なアプローチが可能である予感はある。

多くの研究者はアーカイブ化を、研究が終わった後に  
行う生データを整理保存の延長線上で理解している。その  
意味でのアーカイブ化は確かに研究の付け足しでつま  
らない。その通念に逆らって、マイノリティと記録の両  
義的な関係という観点からアーカイブ・スタディーズの  
まったく新しい方向性—管理・保存の技術に留まらない  
アーカイブの人文社会科学的な問題化—を樹立しようと  
する試みこそがこのプロジェクトの中核である。

「同時に野蛮の記録ではない文化の記録は決して存在  
しない」というベンヤミンの言葉どおり、マイノリティ  
の記録=データ化は社会的な排除や管理や懐柔の道具で  
あるとともに当事者の抵抗や希望の表現でもある二重性  
を持つ。したがって、マイノリティに関して何かをアー  
カイブとして記録する試みは、不都合な事実からも目を  
背けない勇気、何が事実かを見分ける専門性、記録され  
た事実を使いこなす実践性、その記録を誰に伝えるべき  
かを提案できる人的ネットワークなど、領域横断性の中  
に倫理的な核心を必要とする。

これが先端総合学術研究科の目指すものともつながっ  
ていることはいうまでもない。そして、それを可能とす  
るのが本準備研究の目指す当事者の活動と多領域研究者  
をゆるやかにつなぐ研究組織である。

## プロジェクトをどう具体的に進めるか

当初の考えでは、マイノリティ・アーカイブズについ  
て①さがす・あつめる、②たもつ・つたえる、③つかう・  
いかす、の3つの視点からアプローチすることを予定し  
て、今回のシンポジウムを企画した。

①さがす・あつめる：運営委員の岸政彦（社会学）を  
中心にインタビュー調査を行い、当事者の活動と連  
携しつつスクリプト及びオーラルデータを収集す  
る。発達障害者の生活史や沖縄でのハンセン病（元）  
患者などの調査がすでに進行中である。

②たもつ・つたえる：所長の立岩真也（生存学）を  
中心に記録のアーカイブ化を進め、年間ヒット数  
1000万を超える生存学ウェブサイト（<http://www.arsvi.com/>）で公開していく。

③つかう・いかす：運営委員の松原洋子（科学史）を  
中心に、優生学史などの文献・政府文書の収集を行  
い、当事者活動と連携してアカデミアに留まらない  
社会的アーカイブ利用をも支援する（旧優生保護法  
下の障害者への不妊手術など）。

この三つを有機的に統合するだけでなく、図書館

学、博物館学、著作権法学、障害者への情報保障な  
どの専門家ともネットワークを作り、次の研究展開  
への準備を進めていく。

そして、うれしい誤算によって今回のシンポジウムか  
ら新しい2つの視点が現れてきた。それは、④「かたる・  
つづる」と⑤「たばねる・ならべる」だ。

ユネスコの学習権宣言（1985年）には、学習権として  
読み書きの能力だけでは無く「自分自身の世界を読み取  
り、歴史をつづる権利」もまた挙げられているという。何  
がどのようにアーカイブされるべきかを一人一人の当事  
者や本人がコントロールすることなくして、マイノリ  
ティ・アーカイブズはあり得ない。「さがす・あつめる」  
の切り離し不可能な前提として、「かたる・つづる」とい  
う形で個人やマイノリティのコミュニティが自分自身の  
歴史を作る力能を示すための条件を作り上げていくこと  
に貢献することは、アーカイブズ・スタディーズの重要  
な要素となる。

そして、アーカイブズを「つかう・いかす」ためには、  
それが使いやすい形で整理されていなければならない。  
技術的にいえば、これはデータにどういう参照情報タグ  
をつけていくかという「メタ・データ」の問題だとされ  
てきた。だが、そうではない。

もちろん、資料を整理してうまく使えるようにするに  
は「専門性」が必要だ。そのための専門的なアルシヴィ  
ストが必要とされており、それはプロジェクトとしての  
必要性というよりは、あらゆる研究を支える普遍的基盤  
として求められるのだ、という点は多くの参加者の同意  
を得ていたと思う。

だが、ここで私が強調したいのは（使いやすい）「たば  
ねる・ならべる」というアルシヴィ学の問題設定を、た  
んに技術的な専門性として扱うべきではない、との視点  
だ。たとえば、インターネット空間での強大な産業プラッ  
トホーム GAFAM が顧客のために「たばねる・ならべる」  
を代行してくれたデータベースやアーカイブはとても自  
然で使いやすい。しかし、事物を「たばねる・ならべる」  
ことは、人びとの考え方や行動の選択を強い心理的な力  
で支配する。それを批判的に再考するためには、その「使  
いやすさ」は、何を無用で些末なデータとして排除し、使  
いやすさという効率性のために何を犠牲にし、ユーザー  
が何を行うのを支援するためにあるのか、という問いを  
立てることが必須なのだ。

期せずして、この「かたる・つづる」と「たばねる・  
ならべる」という新たに得られた問題設定は、いずれも  
マイノリティ・アーカイブズにおける主観性と関連して

いる。過去から伝えられた既存の知識や語りや身振りの集積（広義でのアーカイブズ）を基盤として、私たちは社会を読み解き自分たち自身を位置づけて理解し、表現し行動する。誰が「かたる・つづる」を実践するのかという主観性の問題は、誰のために何のためにアーカイブズを「つかう・いかす」のかとの社会的問いに直結する。また、「かたる・つづる」私・私たちは、これまでの「たばねる・ならべる」という歴史の蓄積から半歩だけ身を引きはなすことで、過去の重圧から自由となり、アーカイブズの単なる延長ではない「主観性」を生産することができる。

これまでのアーカイブ研究は、21世紀に入って図書館・博物館などが急速にデジタル化しつつある事態を背景として、まず自然科学系での観測・実験データベースの構築と人文社会科学系での調査・統計データ保存を中心に進められ、近年では聞き取り生データなどの音声記録や人類学的な映像記録のアーカイブ化も議論されつつある。

だが、管理・保存としてのアーカイブ化を行うと同時に、反省的・再帰的にアーカイブという技術と知の形式を人文社会科学的に問い直す研究は存在しない。記録の収集・保存・利用のすべての段階で立場性が問われるマイノリティ・アーカイブズによって初めて可能となるアーカイブ・スタディーズへの新しい理論的貢献である。

「かたる・つづる」、「さがす・あつめる」、「たばねる・ならべる」、「たもつ・つたえる」、「つかう・いかす」との5つの軸をとりあえずの出発点としてプロジェクトは進んでいく。

## 追記

この文章は、科研費の挑戦的研究（萌芽、2019–2020年度、19K21620）の研究計画書を元にして、シンポジウムでの討議を踏まえて大幅に書き直したものである。

本シンポジウムでの安岡健一氏、河村宏氏の発表については都合により、本誌には採録されていない。

本誌刊行は一部、科研費（19K21620）の支援を受けている。

